和歌山大学クリエ映像制作プロジェクト
和歌山大学大学祭の生放送の配信ミッション

作成者・ミッションリーダー　渡邉小百合

1. 目標

- タイムスケジュールの誤差を±5 分以内にする
- 視聴者数を 300 人以上にする
- 事故のない生放送の進行、配信を行う

2. 目的

和歌山大学や大学祭の情報を大学内外の人に知ってもらうことを目的としている。大学祭に行きたいけれど遠くて行けない人、和歌山大学の大学祭の雰囲気を手軽に知りたい人等、大学祭の会場以外の場所にいても大学祭の様子を楽しめるような番組作りを目指す。経済学部棟前に本部を設置し、大きなモニターを外向きに置くことで、実際に大学祭に来ている人達にも番組を楽しんでもらえるようにする。

また、番組の企画、構成、クラブ･サークルへの出演交渉等の活動によって、今後社会に出てからも必要となる企画力やコミュニケーション力といったスキルの向上も目的としている。自分達だけで企画、撮影、放送を行い、1 つの番組を作り上げるといった経験はなかなか出来ることではない。近年ニコニコ生放送やツイキャス等、誰でも簡単に生放送を行える環境になってきているが、本格的な機材を使用して番組を放送することは個人で行うには難しい。一緒に番組を作る仲間との意思疎通、チームワークが重要になる。そして、生放送は限られた時間の中で、あらかじめ決めた時間配分通りに進行していかなければならない。ミスをしても編集でなかったことにすることは出来ず、その時起こったことが全て放送されてしまう。そういった緊張感を体験することで、授業でのプレゼンテーションや就職活動といった緊張する場面においての自信に繋がるのではないかと考えている。

3. 主な活動内容

ライブ配信が行える動画共有サイト Ustream を利用して、和歌山大学大学祭の情報番組『WUF 放送局 2014』を生放送配信する。番組の企画、構成、出演していただく方々へのアポイントメント、VTR や CM の撮影･編集、本番のカメラワーク、スイッチングといった生放送番組制作においての工程を全て自分達で行う。番組の内容としては、クラブ･サークルの方々がゲスト、CM、中継等で出演をし、模擬店や展示、普段の活動の紹介をしていただく。大学祭 1 日目に展示やイベントステージ等の撮影、取材を行い、大学祭 2 日目の午前 10 時より生放送を開始する。1 年生が主体となって活動し、上級生は昨年の経験の伝達及びサポートを行う。

4. 具体的な活動内容

機材講習会

生放送で使用するカメラやVR-5といった機材の使い方を学ぶために行った。特に生放送番組を放送するにあたって重要な役割である、映像の切り替えや音声のミキシングを行う機材・VR-5 は機能や接続部が多いため、1 回で全てを覚えるのは難しい。なので、週に 1 回機材ごとにわかれて講習会を行った。11 月に入ってからは全ての機材が合同で本番の動きの練習を行った。

ミーティング

9月から週に2回、主に1年生が集まり進捗状況の報告やこれからすべき事の確認を行った。2回とも全員が参加出来る日に行いたかったが全員の日程が合う時がなかったため、水曜 1 限と金曜 5 限にわかれてミーティングを行い、ノートにその時話し合った事をまとめて次のミーティングの人達が前に何を話し合ったかわかるようにするという方法をとった。9 月～10 月前半は番組の企画や構成、各自の担当決めといった番組の内容に関する話し合いが中心となり、10月後半～本番前はCMとVTRの編集状況やリハーサルにおいて感じた変更すべき点といった自分達の動きに関する話し合いが中心となった。

クラブ・サークルへの出演交渉

和歌山大学のほぼ全てのクラブ・サークルに番組への出演交渉を行った。各部長へメールにて番組の旨を説明し、番組当日本部に来て司会者とトークをするゲスト出演、大学祭1日目に展示会場の撮影を行う VTR 出演、当日に模擬店へ伺いお話を聞く中継出演、事前に撮影を行いコーナー毎の間に放送するCM出演、番組内の企画であるクイズ大会への出演という 5 つの中から出演したい形を選んでもらった。その結果、ゲスト出演 3 団体、VTR 出演4団体、中継出演3団体、CM出演7団体、クイズ大会出演3団体の合計20団体の出演が決まった。各団体とは直接お会いしての打ち合わせを行い、撮影時間や集合時間を入念に確認した。しかし、打ち合わせの際当日中継することになっていた団体が 1 日目しか模擬店を出さないということが発覚した。そこで急遽 2 日目に模擬店を出す団体と出演交渉をし、本来中継する予定だった団体は 1 日目のダイジェスト映像に模擬店の様子を入れるという形になった。

番組のタイムスケジュール・台本制作

生放送前日と当日のメンバーそれぞれの動きがわかるタイムスケジュールと番組自体のタイムスケジュール、台本の制作を行った。昨年は 1 日目に放送を行ったため当日と番組のタイムスケジュールだけでよかったが、今年は 1 日目に展示やステージの撮影とその編集を行うので、2日間のタイムスケジュールが必要となった。タイムスケジュール作りは誰がいつどう動けばいいかを 1 日の動きを全て想定した上で考えなければいけないため、重

要なものであると同時に非常に大変な作業である。しかし、前日のスケジュールは大学祭 1 日目のステージのスケジュールや展示会場の場所がわからないと、どの順番でどこの何を撮影するかということもわからないため、11 月に入るまで詳しいスケジュールを組めなかった。番組のタイムスケジュール及び台本については、模擬店の生中継や小道具が多く必要となるクイズ大会といった準備に時間を要するコーナーの前に長めの CM や VTR を持ってくる、単調な流れにならないように途中で大きな企画を挟むという工夫をした。

小道具制作

番組内で必要となるフリップや名前のプレート等の小道具の制作を行った。今回の番組において 1 番重要となる小道具が『走れ！わだにゃん！』という企画(詳しい内容は後述する)で必要となるケーキだった。本物のケーキを作るには材料もコストもかかるのでどうやってケーキを作るか悩んだ。皆で話し合い、試行錯誤した結果、ケーキの土台であるスポンジ部分を段ボール、生クリームを紙粘土と水と木工用ボンドを混ぜたもの、イチゴを紙粘土で作ることにした。それぞれ役割分担をし、ほぼ 1 日かけて制作した。

制作したケーキ

広報活動

生放送の予告 CM や Twitter での定期ツイート等で番組の告知を行った。昨年は生放送を行うことを当日しか外部に発信していなかったため視聴者数が非常に少ない結果となってしまった。それを踏まえ、生放送の 1 ヶ月前から Twitter 上で生放送を行う旨のツイートを定期的に流した。Ustream においても数回に渡り 30 分間生放送の予告 CM を放送し、YouTube へも予告 CM を投稿した。予告 CM は少し長めのドラマ風のものと、短くてインパクト重視のものの 2 種類を制作した。また、広報室にお願いし、和歌山大学ホームページのニュース&トピックスにも生放送の紹介記事を載せていただいた。

CM、VTR の撮影、編集

番組中に放送する CM と VTR の撮影、編集を行った。主に CM はクラブ・サークルの活動場所に行き、部員の方による活動内容の紹介と活動の様子を撮影した。大学祭 1 日目には

展示をする団体の映像編集があることと、CM を流している間にセッティングを行うので、リハーサルでも実際に流して練習をしたかったため、11 月上旬中に全ての CM の編集作業を終えた。VTR の撮影は大学祭 1 日目に展示会場やステージイベントを撮影し、その日のうちに全ての編集を終えるというハードなスケジュールだったが、編集作業が短くなるように最初と最後を切って順番に繋げるだけで済むよう事前の打ち合わせをしっかり行ってから撮影した。そのため予定通り編集を終えることが出来た。また、今回初の試みであり、番組の目玉となる大型企画『走れ！わだにゃん！』の撮影と編集があった。『走れ！わだにゃん！』は、わだにゃんが大学のバス停前から総合研究棟前まで走っている間に、フライングディスク部が遠く離れた場所にある部長の誕生日ケーキの上の余分なプレートを倒せるかというドラマ仕立ての挑戦型企画である。この企画はわだにゃんが走っている映像、挑戦中の映像、挑戦前後のドラマ部分の映像が必要となり、撮影と編集に多くの時間を要することが予想されたので、企画が決定し次第すぐに準備を始めた。わだにゃんが走る部分の撮影は広報室から着ぐるみをお借りして、大学内に人が少ない夏休み中に行った。挑戦中とドラマ部分の撮影は当初体育館内で行う予定だったが、フライングディスク部の予定と体育館が利用出来る時間が合わず撮影日の延長が続いたため、急遽場所を第一食堂に変更して 11 月 9 日にようやく撮影することが出来た。撮影するまでに時間があったこともあり撮影自体は順調に進み、予定していた時間内で終了した。この時点で編集期間は 2 週間しか残っていなかったが、わだにゃん部分の編集はほとんど終わっていたので大学祭 1 日目間際に漸く完成した。

『走れ！わだにゃん！』の撮影風景

予行演習

本番通りに機材をセットし、実際に流れを通すことでメンバーが各々の動きの確認を行った。昨年は本番前日の 1 回しか予行演習を行えなかったため、中継先の不具合やゲストの到着の遅れといった突然の事態への対応がうまく出来なかった。これより、今年は最低でも 3 回の予行演習を行うことにした。1 回目、2 回目の予行演習では番組のタイムスケジュール通りに動き、自分の動きのタイミング掴みや実際に通すことでわかった変更すべき点の確認を中心とした。3 回目以降からは突然の事態をわざと起こして、コーナーの順番変

更等に焦らず対応をする練習を行った。この対応にはカンペで指示を出すフロアディレクター、番組の進行をする司会者、映像を切り替える VR-5 が特に重要となる。担当は予行演習だけでなく各々でも練習を行い、突然の事態への対応に備えた。

本番

11 月 23 日午前 10 時 10 分より和歌山大学大学祭の情報番組『WUF 放送局 2014』の生放送配信を行った。総合研究棟の活動場所から経済学部棟前まで機材を運び出し、生放送開始 1 時間前までに設置を完了させるため、朝早くから学校に集まり準備を始めた。設置後は機材の動作や各々の動き、流れ等の最終確認を行い本番に備えた。当初は 9 時 50 分よりこの後放送を開始する旨のテロップを表示させ、10 時から番組を開始する予定だったが、模擬店の生中継を行うカメラからの映像と音声が不安定になったため、番組開始を 10 分繰り下げた。番組開始後はタイムスケジュール通り順調に進んでいたが、1 回目の模擬店中継前に中継カメラの映像が届かなくなったため、コーナーの順番を入れ替えて問題解決を行った。これ以降、特に大きなトラブルも時間の巻きや押しもなく予定時間通り番組を終了することが出来た。

本番前の確認

生放送中の様子

5. 結果・成果

番組の配信、進行に関しては、番組開始直前に AV ケーブルによる中継先の映像と音声に不具合が生じたため開始時間を 10 分繰り下げたが、番組開始後の各コーナーの時間配分はほぼタイムスケジュール通り進んだ。再度中継先の映像が届かなくなる事態になりコーナーの入れ替えを行ったが、各々がすぐに対応出来たので視聴者側からは予定通り番組が進んでいるように見せることが出来ていた。番組の進行が止まる、配信を中断するといった事故もなく、予定していた 98 分間で番組内の全ての企画を無事放送することが出来た。視聴者数は 249 人で、目標である 300 人には惜しくも到達しなかったが、昨年と比べると 10 倍以上に増えているため、広報活動の効果がみられた。予行演習不足や広報活動不足といった昨年度の反省を取り入れたことが今年度の生放送の成功に繋がった。

6. 今後の課題・展望

今年度の大きな反省点としては3つある。1つ目は、昨年度の準備期間が少なかったため今年度は 1 ヶ月早くから準備作業を行っていたにもかかわらず、後半になるとやらなければいけない作業が詰まってきてしまったことだ。これは主に『走れ！わだにゃん！』において体育館を使用出来る日がなかなかなく、撮影が11月上旬まで延びてしまったことが原因である。今回は運良く第一食堂を代わりに使用することが出来たが、企画が中止になっていた可能性もある。撮影場所を決める際は前もって使用出来る日時も調べることが必要である。2つ目は、メンバー間での情報伝達が十分に出来ておらず、担当者に聞かないと進行状況がわからないという事態が多かったことだ。週 2 回ミーティングを開いていたが、必ず全員が参加出来ていたわけではなかった。特にクラブ・サークルへの出演交渉を行う際には1人ずつ数団体担当を割り振っており、どこから返事が来ていてどこがまだかといった情報が全体に伝わっていなかったため、担当者への確認に時間がかかってしまった。これより、ミーティングに参加出来ない場合は文面で自分の持っている情報を全体に伝えておく、重要事項や急いでいる情報はミーティングまで待たず早めに全体で共有するように心がけなければならないと感じた。また、ノートにまとめるとどこのページに知りたい情報が書かれているのかすぐにわからないため、大きな模造紙にまとめて見えやすい場所に貼っておく方がいいのではないかという意見もあった。最後の 3 つ目は、人によって作業量に偏りがあったことだ。メンバーそれぞれ参加出来る時間が違うためどうしても参加率の差は生まれ、参加率が高い人に作業が回っていく。そうなると、ある人は作業が詰まっていて他のことに目がいかず、ある人は何もすることがないし何をすればいいかもわからない状態になり、結果的に全体の作業が遅れてしまう。それではどちらにとっても良い状況とは言えない。クリエの性質上難しい問題ではあるが、なるべくあまり参加が出来ない人でも出来る作業を割り振って特定の人の負担が大きくなることを防ぎ、なおかつ皆が作業に関われるように考えていかなければならない。これら 3 つの反省点は、このミッションだけに関わらずプロジェクト全体の活動をしていく時においても今後の課題となるものである。対策をしっかりと考えて、今後の活動をより良いものにしていきたい。

7. 感想

私にとっては 2 回目の生放送ということもあり、一通りのやり方がわかっているので少し気持ちに余裕を持って行動することが出来ました。昨年と比べると準備も番組の進行も良いものになりましたが、まだまだ改善することはたくさんあります。この反省をプロジェクト活動としてだけではなく、自分自身のこれからの行動にも生かしていきたいと思います。

最後に、協働教育センターをはじめとして、当ミッションにご支援・ご協力いただいた全ての方々に心より感謝いたします。